私のばあちゃん

ばあちゃんの思い出

ばあちゃんは、私のことをとても可愛がってくれていました。

小さい頃、鼻炎に苦しむ私を見かねて、病院へ連れて行ってくれました。何時間も待ち続けたのに注射嫌いだった私は、診察室から逃げ出してしまい、ばあちゃんを困らせてしまったことがありました。それでも、ばあちゃんは「病院で頑張って待ち続けたご褒美だから」と小さい私の手を引いて、路線バスを乗り継ぎ鯛生金山へ連れて行ってくれました。

そんな、ばあちゃんが3年前に亡くなりました。

晩年のばあちゃん

ばあちゃんは、長屋のアパートで一人暮らしをしていました。元気なうちはバスに乗って買い物に出ていました。足腰が弱ってからは両親が週末に通い、身の回りの支援を続けていました。度々同居の誘いをしていましたが、40年以上も住み続けた住まいから離れることはありませんでした。両親は、定期的に訪問する民生委員さんから、その様子を伝えてもらっているようでした。

ばあちゃんの部屋の隣には、ばあちゃんと同じく40年以上住んでいるお隣さんがいます。お隣さんは、毎日あいさつや声掛けをしてくれていました。

ばあちゃんの最期

最初に異変に気づいたのは、お隣さんでした。

亡くなった当日もいつものようにあいさつをしてみましたが、返事はもどってきません。

「多分、寝ているのだろう。」とお隣さんは思い、その場を後にしました。翌日、同じようにあいさつをしてみましたがやはり返事がありません。新聞受けを見ると、前日の新聞がそのままになっていて、2日分の新聞が溜まっています。ばあちゃんが日課に新聞を読むことを知っているお隣さんは、「様子がおかしい。」と感じすぐに民生委員さんに連絡をしました。

大家さんとも連絡がつながり、一緒に部屋の中を確認することになりました。すると、そこには片手に好物のお饅頭を持ったままのおばあちゃんの姿があったことを教えてもらいました。

いつもと同じような暮らしをする途中で、ふっと灯が消えるように命を終えたようでした。

ばあちゃんを支えた地域

ばあちゃんの最期は、状況だけを見れば、一人ぼっちだったかもしれません。

しかし、その様子を聞いた私は、「一人暮らしをしていたが、孤独ではなかったのではないか。」と思いました。住み慣れた家や地域を離れ、両親と過ごす生活より気心知れた近所付き合いの中で生活することを選んだばあちゃん。しかし、そういった安心して一人暮らしができたのは、両親の支えの他に、長年培ってきた近所付き合いと民生委員さんの定期訪問という「地域の支え」があったからだと思います。また、互いに連絡を取り合える状況が、最期から間もないうちにばあちゃんに気づき、発見へとつながったのだろうと思います。

私もばあちゃんと同じような地域の絆が築けるかはわかりませんが、その一歩としてご近所へのあいさつや声掛けを大切にしたいと思います。